

様式（7）

報告番号	甲 保 第 53 号 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	谷岡 龍一
題 目	Usefulness of 2D Video Analysis for Evaluation of Shoulder Range of Motion during Upper Limb Exercise in Patients with Psychiatric Disorders (精神障害患者の上肢運動中の肩関節可動域を評価するための2Dビデオ分析の有用性)
<p><b>背景：</b>日本は、総人口に占める65歳以上の割合が最も高く高齢化が急速に進んでいる。加齢とそれに伴う問題は、精神疾患患者のケアに影響を与える。高齢になると筋肉量が減少し、関節可動域（ROM）の範囲が狭くなる。ROM運動には、受動的および能動的な運動がある。一般的に使用されるゴニオメーターでは運動中のROMを測定することはできないが、2次元データを利用したImageJでは、運動中の画像や動画を使ってROMを測定することができる。</p> <p><b>目的：</b>本研究では、精神疾患患者の上肢運動時のROMを評価するための2次元ビデオ解析の有用性を明らかにすることである。</p> <p><b>方法：</b>被験者（N=54）は精神疾患患者である。ゴニオメーターを使用して安静時の左右の肩関節の受動的ROMを測定した。また、ImageJを用いて運動時の能動的ROMを測定し、それらを比較検討した。また本研究では、Barthel IndexによるADLレベル、肩関節可動域角度が130度以上か未満、代償動作の有無に群分けした。さらに、疾患関連因子は、診断プロファイルの構成要素として、患者の年齢、薬原性錐体外路症状評価尺度（DIEPSS）、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）の得点、併存疾患の有無、精神科入院期間などの個人属性により評価した。</p> <p><b>結果：</b>疾患群、ADLレベル、肩関節可動域角度による分類では、受動的ROMと能動的ROMの間には、有意差を認めなかった。しかし、代償動作を考慮すると、代償動作のある群では、左側（<math>z=-2.30</math>、<math>p=0.02</math>）に、代償動作のない群では、右側（<math>z=-2.63</math>、<math>p&lt;0.001</math>）に、受動的ROMと能動的ROMの間に有意差を認めた。</p> <p><b>結論：</b>セラピストが測定した受動的ROMとImageJで測定した能動的ROMを比較した結果、左右の肩関節の屈曲に有意な差は認められず、運動時のROMにも左右差は認められなかった。ImageJによる測定結果は、測定精度が高いと考えられる。統合失調症患者や認知症患者は、肩関節ROMに障害を抱えていることがいくつかの先行研究で示唆されているため、これらの人々の運動中の能動的ROMを評価することは、代償動作を考慮したリハビリテーション計画の立案と、その成果を決定する上で重要である。</p>	